九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

已然形に承接して反語を表はす「かも」

鶴, 久

https://doi.org/10.15017/12270

出版情報：語文研究. 18, pp.11-16, 1964-08-31. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：

已然形に承接して反語を表はす「かも」

鶴久

一

「かも」が活用形の已然形に承接して

古を仰ぎて今を恋ひざらめかも（古今集・序）

山科の音羽の山の音にだに人の知るべくわが恋めかも（古今集・六六四）

註　墨滅歌では「恋めやも」になってゐる。

の如く、反語を表はすことは既に先学によって指摘されてきたのである。しかしながら、かかる用例は極めて少く、普通、反語を表はす場合には、特に上代においては、

(1) とこしへに君も師門柳毛いさなとり海の浜藻の寄る時々を（允恭紀）

(2) 沖つ波辺波立つともわがせこがみ船のとまり瀾立目八方（万三・二四七）

(3) 銀も金も玉もなにせむにまされる宝子に斯迦米夜母（万五・八〇三）

(4) わぎもこが結ひてし紐を将解八方たえば絶ゆとも直にあふまでに（万九・一七八九）

(5) 百に千に人は言ふともつき草のうつろふ心われ将持八方（万十二・三〇五九）

(6) あしひきの山桜花一目だに君とし見てばあれ古非米夜母（万十七・三九七〇）

(7) 大和へに西風吹きあげて雲ばなれ退きをりともよわれ和須禮米夜（仁徳記）

(8) 大名児ををちかた野辺に刈る草のつかの間もわれ忘目八（万二・一一〇）

(9) わが命のまたけむかぎり忘目八いや目にけには思ひますとも（万四・五九五）

(10) 見むと言はば伊奈等伊波米也梅の花散りすぐるまで君がきまさぬ（万二十・四四九七）

のやうに、助詞「や」「やも」が活用形の已然形に接してその機能をはたしてゐるのであり、万葉集だけでも枚挙に遑がない。したが

って、前掲の古今集の如き、活用形の已然形に助詞「かも」が接して反語を表はすやうな例は特異な存在として注目され、しかも上代の文献には所謂中央語としての用例を缺いてゐるのである。ただ、東国方言といはれる万葉集の東歌や防人歌に限って、

ⓐ しだの浦をあさこぐ船はよしなしに許求良米可母與なしこざるらめ（十四・三四三〇、駿河）

ⓑ 陸奥のあだたらまゆみはじきおきて西良思馬伎奈波都良波可馬可毛（十四・三四三七、陸奥）

ⓒ 大船をへゆもともゆもかためてしこそのさと人阿良波左米可母（十四・三五五九）

ⓓ 橘の下ふく風のかぐはしき筑波の山を古比受安良米可母（二十・四三七一、常陸）

ⓔ むらたまのくるにくぎさしかためとし妹が心は阿用久奈米加母（二十・四三九〇、下総）

の如く存在するのは刮目に價するのではなからうか。しかるに、従来の文法書には活用形の已然形に接して反語の意を表はす「や」「やも」と同様、「かも」にも同様な意味機能のあることを、前掲の古今集の例や東歌、防人歌の例により認めて、活用形の已然形に承接して反語の意を表示する場合があると解かれてきたのである。山田孝雄博士によれば（奈良朝文法史P 506）

…いかさまに念鶏目鳴つれもなき佐保の山べに泣く子なす慕ひきまして…（万三・四六〇）

もその例に入れられてゐるが、これは反語と解しては意味をなさず、例へば日本古典文学大系万葉集・万葉集注釈のやうに疑問を表はす「かも」と解すべきところであり、活用形の已然形に接して反語を表はす「かも」は、上代においては佐伯梅友博士（万葉語の研究P 40－P 41）や福田良輔博士（万葉集大成4訓話篇P 206）等が言はれてゐるやうに、東歌・防人歌に限られてゐると認めて良さそうである。

しからば、「かも」が活用形の已然形に接して反語を表はすといふのは、東国方言にのみ現はれる方言的特殊現象なのであらうか。もし、東国方言の特色の一とすれば、それは文法的特色であらうか、それとも音韻的特色なのであらうか。或いは、古今集の例を加味して、現存する限られた上代文献には不幸にして残存しなかった例がたまたま平安時代になって古今集に現はれたものと考へるべきであらうか。この辺の事については自明のこととしてか言及されたものを見ないのである。（註1）

二

ところで、東歌・防人歌において反語を表はすときには中央語と異なり、前掲したⓐ～ⓔの用例のやうに常に活用形の已然形に「かも」がついた場合に限られてゐるかといふと、必ずしもさうではない。

(イ) うなばらのねやはら小菅あまたあれば君は忘らす和禮和須流禮夜（十四・三四九八）

(ロ) あせかがた潮干のゆたにおもへらばうけらが花の色に氐米也母（十四・三五〇五）

(ハ) 芝付のみうらざきなる根つこ草あひ見ずあらば安禮古非米

夜母（十四・三五〇八）

(ニ) にほ鳥のかづしかわせをにへすともその愛しきを刀爾多氐米也母（十四・三三八六）

等の例でもわかるやうに、やはり中央語と同じく、活用語に「や」「やも」がついて反語の意を表はしてゐる。これらの例は意味の上からしても

(イ) 和禮相須流禮夜（私があなたを忘れることがございませうか。絶対ございません。）

(ロ) 伊呂爾氐米也母（顔色に出ることがありませうか。決してございません。切に思ふからこそ顔色にまで出るのです。）

(ハ) 安禮古非米夜母（私は恋ふることがありませうか。決してありません。）

(ニ) 刀爾多氐米也母（愛しい人を外に立たせることがありませうか。絶対にそんなことはいたしません。）

となり、前掲した(1)～(10)などの中央語の例と少しも変るところはない。その反語も非常に強く、「決して……ない」といふ気持を如実に表はしてゐるといふことができる。これに対して活用形の已然形についた「かも」の場合には

ⓐ 許求良米可母與（理由なしに漕いでゐるのであらうか。まさかそんなことはあるまい。多分理由があってであらう。）

ⓑ 都良波可馬可毛（再び弦をとりつけることがあらうか。まさかそんなことはできまい。）＝正確には譬喩不明。

ⓒ 阿良波左米可母（あらはすことがあらうか。まさか言ひふらすことはあるまい。）

ⓓ 古比受安良米可母（恋ひないでゐることができようか。まさかさうはゆくまい。）

ⓔ 阿用久奈米加母（しっかりと契った妻の心は動揺することがあらうか。まさかそんなことはあるまい。）

となり、同じ反語でも「や」「やも」の場合の「絶対にさうでない」という気持と相違して、「まさかそんなことはあるまい」「多分そんなことはないだらう」といふ気持であり、極端な言ひ方をすれば、「めやも」と「めかも」には「絶対に」「決して」に対する「おそらく」「多分」「まさか」といふほどの差異が見られる。いはば、「めや」「めやも」には絶対にそのやうな餘地があり得ないのに対して、「めかも」にはまさかそんなことはあるまいが、万が一といふことがあるやうに、或事実の介入する餘地が残ってゐるのである。つまり反語の意味は従来疑問が強くなると出てくると言はれてゐるが、めや・めやもが純然たる反語の意を表はしてゐるのに対し、めかもには疑が強くなって反語の意が生じてきた名残を残してゐるやうに思はれる。即ち、この「めかも」は活用語の連体形に接して反語の意を表はしてゐる例、例へば

常の恋いまだやまぬに都より馬に恋こば爾奈比安倍牟可母（万十八・四〇八三）

の如き「むかも」と同じやうな意味を表はしてゐることになる。形の上では已然形に接した「かも」であっても、意味上は連体形に接して反語を表はす「かも」と何等変りはない。このやうに、活用語の連体形に「かも」が接して反語をなす場合は何も中央語のみなら

ず、東国語にも、例へば

たらちねの母を別れてまこと我旅のかりほに夜須久禰牟加母
（二十・四三四八、上総）

の例が見られ、意味も「めや」「めやも」の場合と相違して、「めかも」の場合の反語に極めて近いといふことができる。このやうな「むかも」も原初的には多分に詠嘆的な疑問を表はしてゐたものであり、疑が更に強くなって反語を表はすやうになったものである。

生ふしもとこの本山のましばにも告らぬ妹が名象に伊豆牟可母
（十四・三四八八）

の「むかも」などは諸註、疑問、反語の両説に分かれてゐるやうに何れとも解釈が可能であり、おそらく疑問から反語に移行する過渡的な姿をとどめてゐるものであらう。

按ずるに、上代文献において、東国方言に限って現はれる活用語の已然形に接して反語を表はす「かも」は、実は前記の「夜須久禰牟加母（四三四八）」の「かも」と同様、形は活用語の已然形に接してゐるやうであっても、その連体形に承接した、いはば中央語における場合と同じと見るべきではないかと思ふのである。「めかも」と已然形についてゐるやうに見えるのは、中央語の〔u〕が〔ē〕になってゐる東國方言の特徴の一と見做される。つまり中央語における助動詞「む」の連体形が「め」に変化して、已然形のやうな現象を呈してゐるのであり、それはあくまでも連体形の機能をはたしてゐると見られる。かかる音韻現象などにおける東國方言の特色については、夙に福田良輔博士が秀れた御論考（奈良時代東國方言の成立について 文学研究37・38・40輯）を発表になってをられるところであり、今更贅言の必要はあるまい。ただ、中央語において〔u〕であるものが東國語で〔ē〕になってゐるのは

家ろには葦火たけどもすみよけを筑紫にいたりて古布志気毛波母
（二十・四四一九、武蔵）

とやの野に兎ねらはりをさをさも寝なへ子ゆゑに母に許呂波要
（十四・三五二九）

の如く、例が少ない。したがって、〔u〕が〔ē〕になった例が存在するといふだけでは傍証の役にも立たず、加へて例が少ないとあっては、私案の根拠はなくなり、その可能性も稀薄になるであらう。しかしながら、見逃せないことは、前掲した

ⓐ しだの浦をあさ漕ぐ船はよしなしに許求良米可母與なし許佐流良米
（十四・三四三〇）

の歌には「こぐらめかもよ」と「なしこざるらめ」が共存してゐることである。結句の「奈」は元暦校本にのみ「余」とあり、これに従ってゐる註釈書もあるが、仙覺系統の写本は勿論、類聚古集や古葉略類聚鈔などの他の古写本にも「奈」となってをり、「余」でなければならない理由はない。むしろ、「よしなしにこぐめらかもよ」に対して「余しこさるらめ」とすれば、「こぐらめかもよ」が「理由なしにあてもなく漕いでゐるのであらうか。まさかそんなことはあるまい。多分理由があってのことであらう」といふ意であるのに対し、「余しこさるらめ」は「よしこそあるらめ」の融合縮約されたものと見るわけで、つまり結句「よしこそあるらめ＝理由があるのであらう」の意は、すでに「こぐらめかもよ」に含まれてをり、

同じ意味を再度くり返すことになる。この句については福田良輔博士が万葉集大成4訓詁篇（巻十四P202）に述べてゐられる如く、元暦校本以外の写本に従ひ「なしこざるらめ」とし、「なしござるらめ」は「何故来ざるらむ」の東國語と見て間違ひないところであらう。「良米」は「奈志」の存在からして連体形ラムがラメと音変化をしたものであることがわかる。したがって、このやうな例が共存してゐる「許求良米可母與」の「良米」をラムの音変化したものと見做すことは既述の諸点、特に、意味的に連体形に承接して反語を表はす「かも」と一致してゐることを加味した場合、極めて妥当性に富んだ自然な考へと思はれる。しかして、中央語の助動詞「む」「らむ」の連体形が東國語で「め」「らめ」になることがあるのは十分に首肯されるところであり、ⓑ～ⓔの「めかも」も中央語の「むかも」が「めかも」になった東國方言と認めることができるであらう。

三

されば、これまで東國語に限って「かも」が活用語の已然形に承接して反語を表はすと見做されてゐたのは、実は活用語の連体形に承接してゐたのであり、その活用語の連体形が音変化をきたして恰も已然形の如き現象を呈してゐたにすぎず、現存する上代文献において、活用語の已然形に接続して反語を表はす「かも」は姿を消すわけである。とすると、已然形に承接して反語を表はす「かも」は平安時代でも最初に挙げた古今集の歌二例といふことになるが、古今集六六四番の歌は写本によっては「やも」となってゐるものであり、墨滅歌でも前記したように「やも」となってゐる。序の方はほとんど古写本一致して「かも」になってはゐるが、池田亀鑑博士が貫之原本の姿をもっともよくとどめてゐると言はれる鈴木直徳写陽明家本古今和歌集序には「やも」となってゐるのである。したがって、古今集序と六六四番の「かも」二例も確実な用例として、必ずしも已然形に承接して反語を表はす例とは言ひきれない。むしろ、意味的には「やも」とあるべきところである。したがって、この二例の「かも」を「やも」となってゐる写本に従って除外してしまへば、上代文献では勿論、平安時代でも、活用語の已然形に承接して反語を表はす「かも」の用例は皆無となるのであるが、鈴木直徳写陽明家本古今和歌集序には疑問の餘地もあり、かなり疑ってをられる学者（例へば西下経一博士「古今集伝本の研究」）もあるほどで、依然として問題は解消されない。それ故、古今集序の「かも」の例だけは已然形に承接して反語を表はす用例として認めるとすれば、これは平安時代になって新しく発生したものとすべきであらうか。しかしながら、このやうに考へると已然形承接の「やも」でさへも、反語を表はす例は、平安時代では歌に限り上代の遺影をとどめてゐるほどで、散文では「かは」「やは」「むや」などが専ら反語の役をはたしてゐることと矛盾してきて、この種の「かも」が平安時代になって新しく発生したとも見做し難い。或いは、

夏引の白絲七蛍ありさ衣に織りても着せむ　まし妻はなれよ
かたくなにもの言ふ女かなな　まし麻衣もわが妻のごとも　訣
よく着よく肩よく　小頸やすらに万之敝世女加毛　奴比支世
女加毛（催馬楽・夏引）

の「かも」を已然形承接の反語を意味する例と見做して、少くとも口語的に古くから存在してゐた「めかも」が現存する上代文献には姿をとどめず、たま〳〵平安時代の古今集序や催馬楽に遺影をとどめてゐると見るべきであらうか。ところで、催馬楽の「めかも」は「めやも」のやうな強い反語ではなく、意味的には「むかも」と同様「まさか」の介入の餘地を有してをり、たしかに東歌・防人歌の「めかも」と系統を同じくしてゐる。たゞ、古今集序の「めかも」とは意味的に相違し、古今集序の「めかも」と催馬楽の「めかも」は必ずしも同一視することはできない。それでは、言語の位相差と考へ、東國語が庶民的な言葉として催馬楽にうけつがれたものと見做すべきであらうか。ただ、かりにさう考へるとしても、例へば、上代における中央語の「拾ひふ」は平安時代に「拾ろふ」となってゐるが、すでに東歌に

信濃なるちくまの河のさざれ石も君しふみてば多麻等比呂波牟（たまとひろはむ）
（十四・三四〇〇）

と見えてをり、催馬楽（伊勢の海）にも

伊勢の海の清きなぎさに（やひろはむや）しほがひになのりそや摘まむ（たまやひろはむや）　加比（かひ）
也比呂波牟也　多夫也比呂波牟也（たまもひろはむ）
古説　太万毛比呂波无（たまもひろはむ）　加比毛比呂波无（かひもひろはむ）

の如く見られ、それは古今集その他の平安朝文献にも屢々用ゐられてゐるところであり、「ひろふ」が一概に東國語とのみは言はれないやうに、古今集や催馬楽に見られる「めかも」も東國語に脈絡が全くないとも断言できない。しかしながら、東歌・防人歌に見える「めかも」が古今集や催馬楽の「めかも」とつながりがあり、必ずしも東國語とばかり言はれないといふ可能性の餘地があることは十分認めながらも、「めかも」の場合は「拾ろふ」の場合とは餘程事情を異にし、古今集の「めかも」は「めやも」と同意で用ゐられてをり、東歌・防人歌の「めかも」とは意味的に相違してゐることを考慮し、一方では奈良時代末期より平安時代にかけて「か」「や」の区別がうすれて行き、二者混同して用ゐられるやうにもなったことを思ふとき、貫之の古語意識によって用ゐられたといふ可能性も十分考へられる。

四

以上、活用語の已然形に承接して反語を表はす「かも」について言及してきたが、ここで、結論的に確実視することができることは、これまで考察してきた諸点を勘案して、万葉集の東歌・防人歌に見える「めかも」は「むかも」が音変化をして東國方言の一特色をなしてゐること、したがって、従来活用語の已然形に承接して反語を表はす「かも」は上代文献からは姿を消すといふことであらう。

〔註1〕管見に入る限りでは、木下正俊氏が「けめかも」攷（国語国文二十三巻三号）といふ論考において、疑問を提示してゐられる。

〔註2〕これは、連用形で結んだ例とも解せられ、両説がある。